

# 家庭的諸条件の人格発達に及ぼす影響

町 田 恭 三

## I. 調査の目的

青少年の人格形成に影響を与える環境的要因のうち、最も強い影響力を持っているものは家庭環境である。家庭環境の、ある条件の下に醸し出された雰囲気なり、態度なりの影響は、青年期は極めて可塑性に富んでいる段階でもあり、又家庭は精神的にも肉体的にも強い拠り処となつている処でもあるだけに、予想以上に大きなものがあるのである。条件の中には、人格形成上プラスの影響を与えるものもあるであろうし、又マイナスの影響を与えるものもあるであろう。プラスの影響を与える条件は一応措くとしても、マイナスの影響を与える条件については、教師も親も強い関心を払い、少しでもこれを減殺するように努力しなければならない。私はどのような家庭的条件が、どのような影響を具体的に青少年の人格面に及ぼすかを調査し、特にマイナスの影響を与える家庭的条件、あるいはそれら条件の内部に潜むものについて解明し、青少年の教育に携わる親、教師に参考の資料を提供しようと思うのである。

## II. 調査の対象と方法

調査の対象は女子大学生で、被験者総数 258 名。調査は全員に質問紙と性格検査用紙<sup>(1)</sup>を配布して実施し、各特性<sup>(2)</sup>別、各群<sup>(3)</sup>別に集計整理、全員の各特性別平均点<sup>(4)</sup>と各群の平均点とを比較した。

## III. 調査の結果

調査の結果は以下の図表に示す通りである。表には全員の特性別平均点と各群の項目別平均点との間の差が、 $t$  検定の結果 5% 以下の危険率をもつて有意差と認められたもののみを示した。又有意差は認められなくとも、全体的に眺めて他群、あるいは全員の平均線に比較し、特殊な傾向を示していると考えられる群については、有意差の有無に拘らず、全特性に亘つて、その群の平均点を図示してみた。すなわち表は全員の平均点に対して有意差のある各群の特性を示し、図は各群の一般的、特殊的傾向を示したものである。

家庭的諸条件と子供との性格的特長

(A)

(註) 1. 特性欄に数字の記入してある特性のみが、危険率5%以下で有意差のあるものである。  
 2. 欄中の大きな数字、例えば末子の欄の14.10は、末子群の第II特性、神経質的傾向の平均点から全員のその平均点を差し引いた差が、14.10であることを示している。

特性	出生順位と子供との性格		兄弟姉妹の数と子供との性格		家族との年齢差と子供との性格				直ぐ上の兄弟との年齢差		直ぐ下の弟妹との年齢差
	末子	同性のみの数	総数	同性のみの数	父との年齢差	母との年齢差	長子との年齢差	16年以上の者	2年の者	3年の者	4年の者
I											
II	14.10 t=2.55 0.01<P<0.02				12.62 t=2.15 0.02<P<0.05					9.39 t=1.99 0.02<P<0.05	
III										10.53 t=2.29 0.02<P<0.05	
IV	-10.38 t=2.39 0.01<P<0.02	12.14 t=2.49 0.01<P<0.02			8.96 t=2.55 0.01<P<0.02	21.30 t=2.04 0.02<P<0.05				-9.29 t=2.11 0.02<P<0.05	11.28 t=2.18 0.02<P<0.05
イ											
ロ											
ハ											
ニ											
ホ										10.94 t=2.02 0.02<P<0.05	
ヘ	-11.69 t=2.42 0.01<P<0.02	12.81 t=2.41 0.01<P<0.02			9.23 t=2.45 0.01<P<0.02						
ト						26.14 t=2.17 0.02<P<0.05				-10.45 t=2.07 0.02<P<0.05	10.98 t=2.49 0.01<P<0.02
N	28	33	13	68	7	25	62	15	49	43	30

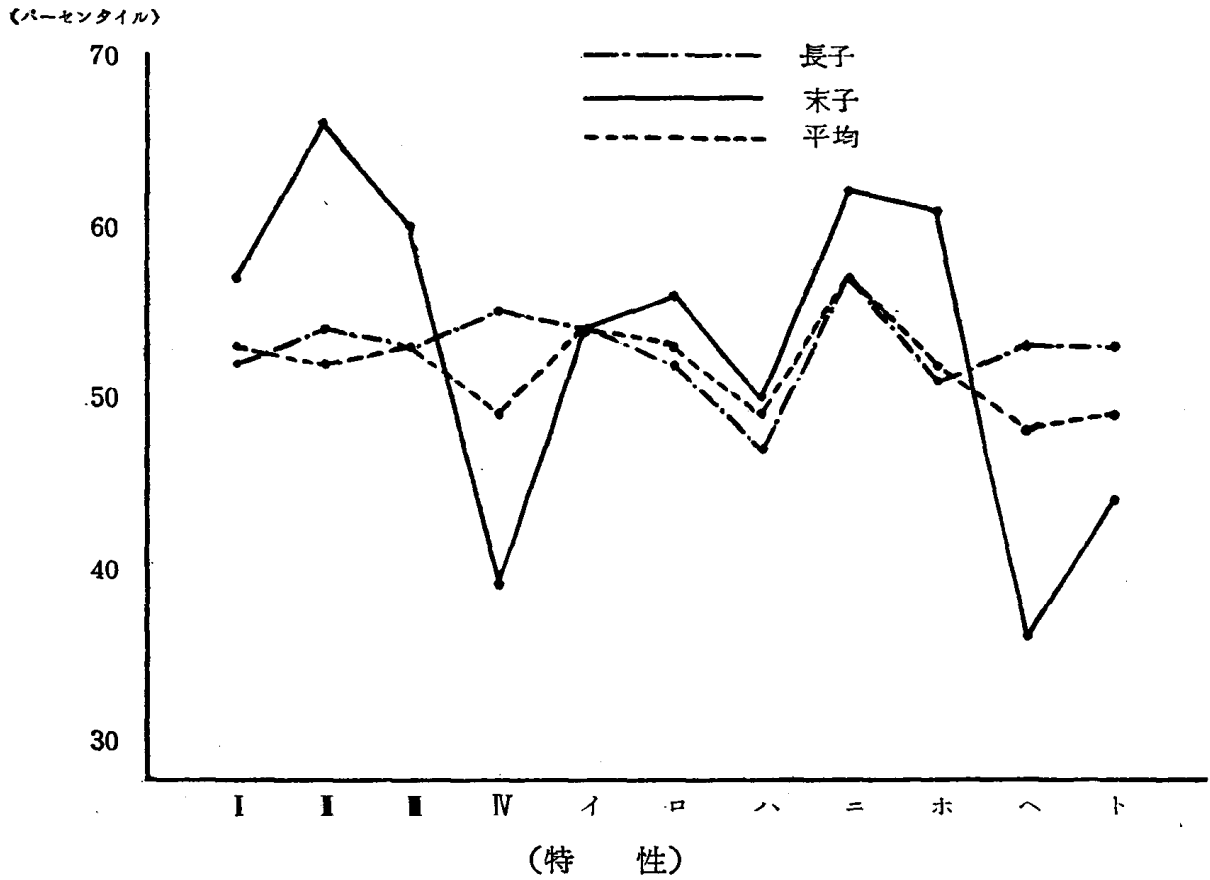
特性 群	家の職業と子供の性格		親の職業・社会的地位に対して持つ感情と子供の感情		家庭内に於けるトラブルの数と子供の性格			親の教育・文化に対する関心度と子供の性格		
	筋肉労働的職業の者	優越感又は好意を持つ者	特別な感情を持っていない者	劣等感又は嫌悪感を持つ者	多い者	時々はある者	殆んどない者	高い者	普通の者	低い者
I		-7.29 t=4.46 P<0.001		17.13	31.29 t=4.13 P<0.001	7.07 t=2.38 0.01<P<0.02	-9.39 t=3.66 P<0.001			24.31 t=2.05 0.02<P<0.05
II				15.39 t=4.40 P<0.001	26.46 t=3.18 0.001<P<0.01					35.26 t=2.74 0.001<P<0.01
III										33.88 t=2.66 0.001<P<0.01
IV	-14.36 t=2.06 0.02<P<0.05	6.29 t=2.00 0.02<P<0.05		-10.43 t=2.46 0.01<P<0.02	-17.48 t=2.19 0.02<P<0.05		7.89 t=2.91 0.001<P<0.01			
イ		-6.63 t=2.25 0.02<P<0.05		17.88 t=4.41 P<0.001	34.52 t=4.50 P<0.001	8.65 t=2.98 0.001<P<0.01	-16.60 t=6.45 P<0.001			31.09 t=2.59 0.001<P<0.01
ロ				10.57 t=2.40 0.01<P<0.02	16.67 t=2.02 0.02<P<0.05		-6.85 t=2.43 0.01<P<0.02			
ハ				15.59 t=3.89 P<0.001	35.06 t=4.68 P<0.001		-4.99 t=1.96 0.02<P<0.05			
ニ		-6.32 t=2.39 0.01<P<0.02		10.95 t=3.04 0.001<P<0.01	16.00 t=2.74 0.001<P<0.01		-5.06 t=2.21 0.02<P<0.05			23.97 t=2.29 0.02<P<0.05
ホ		7.17 t=2.13 0.02<P<0.05		15.51 t=3.50 P<0.001	25.49 t=3.02 0.001<P<0.01		-6.63 t=2.33 0.01<P<0.02			37.01 t=2.85 0.001<P<0.01
ク				-9.15 t=2.01 0.02<P<0.05			6.70 t=2.27 0.02<P<0.05			
ト		-16.78 t=2.37 0.01<P<0.02					5.98 t=2.12 0.02<P<0.05			
N	16	96	102	47	12	92	142	135	105	5

特性	家庭の経済状況と子供の性格						両親の強制・干渉の度合と子供の性格		親が批判の度合と子供の性格	
	裕福な者	普通の者	貧困の者	普通の者 欲求不満あり 欲求不満なし	貧困の者 欲求不満あり 欲求不満なし	普通の者 欲求不満あり 欲求不満なし	多い者	殆んどない者	多い者	ない者
I				11.10 t=3.16 0.001<P<0.01	-6.11 t=2.52 0.01<P<0.02	18.48 t=2.07 0.02<P<0.05	23.61 t=3.38 P<0.001	-6.45 t=2.29 0.02<P<0.05	23.49 t=3.28 0.01<P<0.001	-6.29 t=2.58 0.001<P<0.01
II				11.08 t=2.88 0.001<P<0.01		21.68 t=2.25 0.05<P<0.05	25.36 t=2.90 0.01<P<0.001	-6.26 t=2.01 0.02<P<0.05	20.17 t=2.60 0.001<P<0.01	
III			14.21 t=1.97 0.02<P<0.05			21.61 t=2.27 0.02<P<0.05		-8.22 t=2.08 0.001<P<0.01		-7.48 t=2.76 0.001<P<0.01
IV					5.91 t=2.28 0.02<P<0.05					
イ				12.92 t=8.52 P<0.001	-6.36 t=2.65 0.001<P<0.01	19.80 t=2.20 0.02<P<0.05	28.05 t=3.49 P<0.001	-6.02 t=2.11 0.05<P<0.02	26.04 t=3.59 P<0.001	
ロ									21.59 t=2.84 0.001<P<0.01	
ハ				8.43 t=2.42 0.01<P<0.02			23.76 t=3.01 0.001<P<0.01		28.68 t=4.09 P<0.001	
ニ										-4.38 t=2.04 0.02<P<0.05
ホ			15.97 t=2.17 0.02<P<0.05	8.55 t=2.21 0.02<P<0.05	-5.43 t=1.97 0.02<P<0.05	20.41 t=2.84 0.01<P<0.02	20.77 t=2.34 0.01<P<0.02	-8.46 t=2.69 0.001<P<0.01	20.12 t=3.00 0.001<P<0.01	
ク	16.01 t=1.98 0.02<P<0.05			-12.61 t=3.27 0.001<P<0.01	5.70 t=2.04 0.02<P<0.05					
ト				-12.11 t=8.28 0.001<P<0.01	6.43 t=2.42 0.01<P<0.02					
N	14	25	16	64	148	9	11	106	14	146

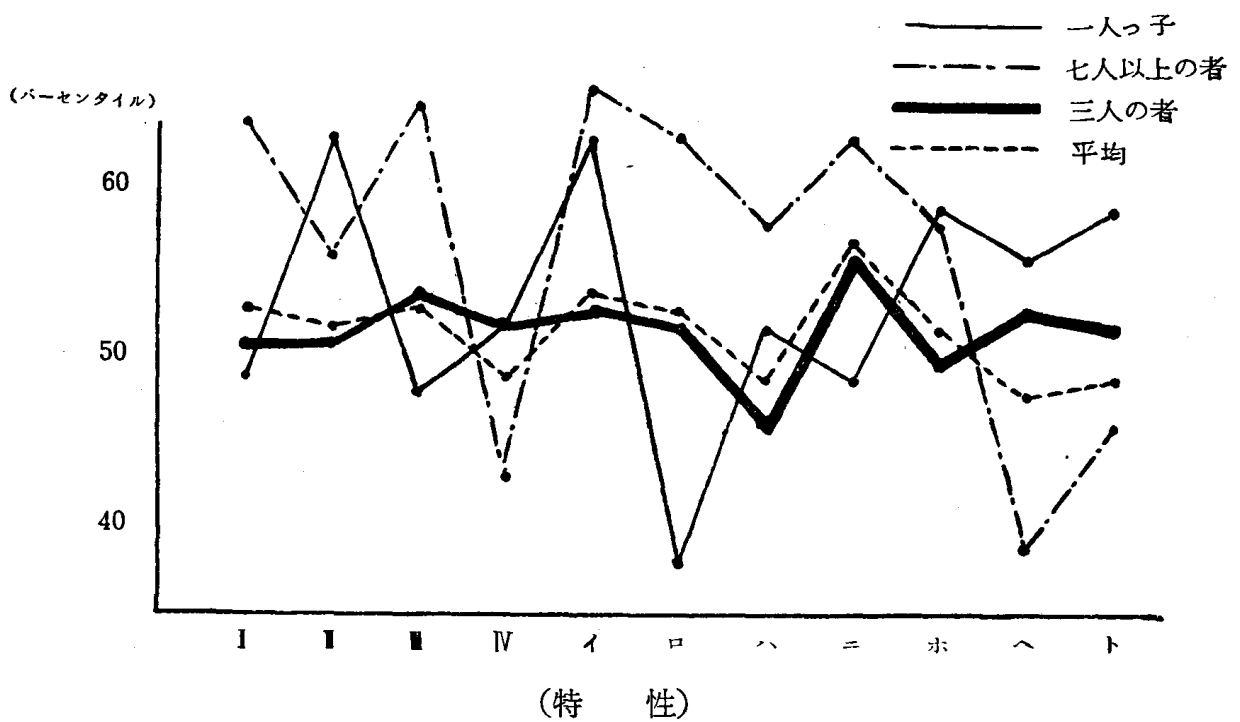
B

(註) 以下の図の“平均”は、全員の各特性に於ける平均パーセンタイルを示したものである。

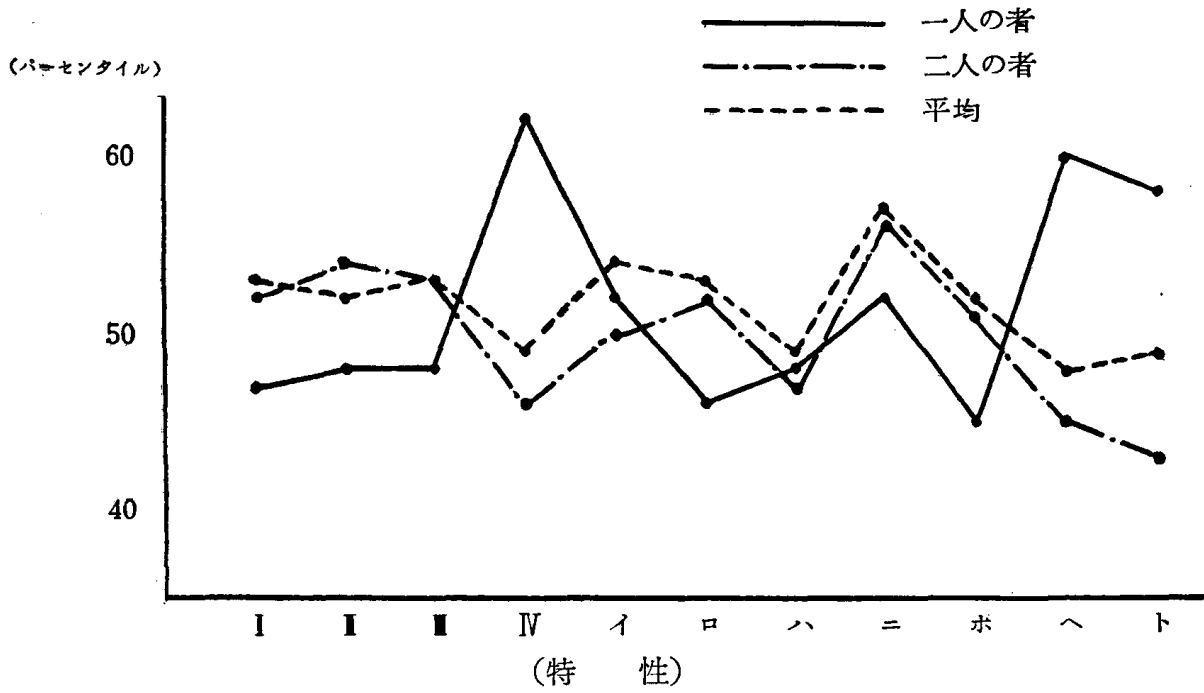
(第1図) 出生順位と子供の性格



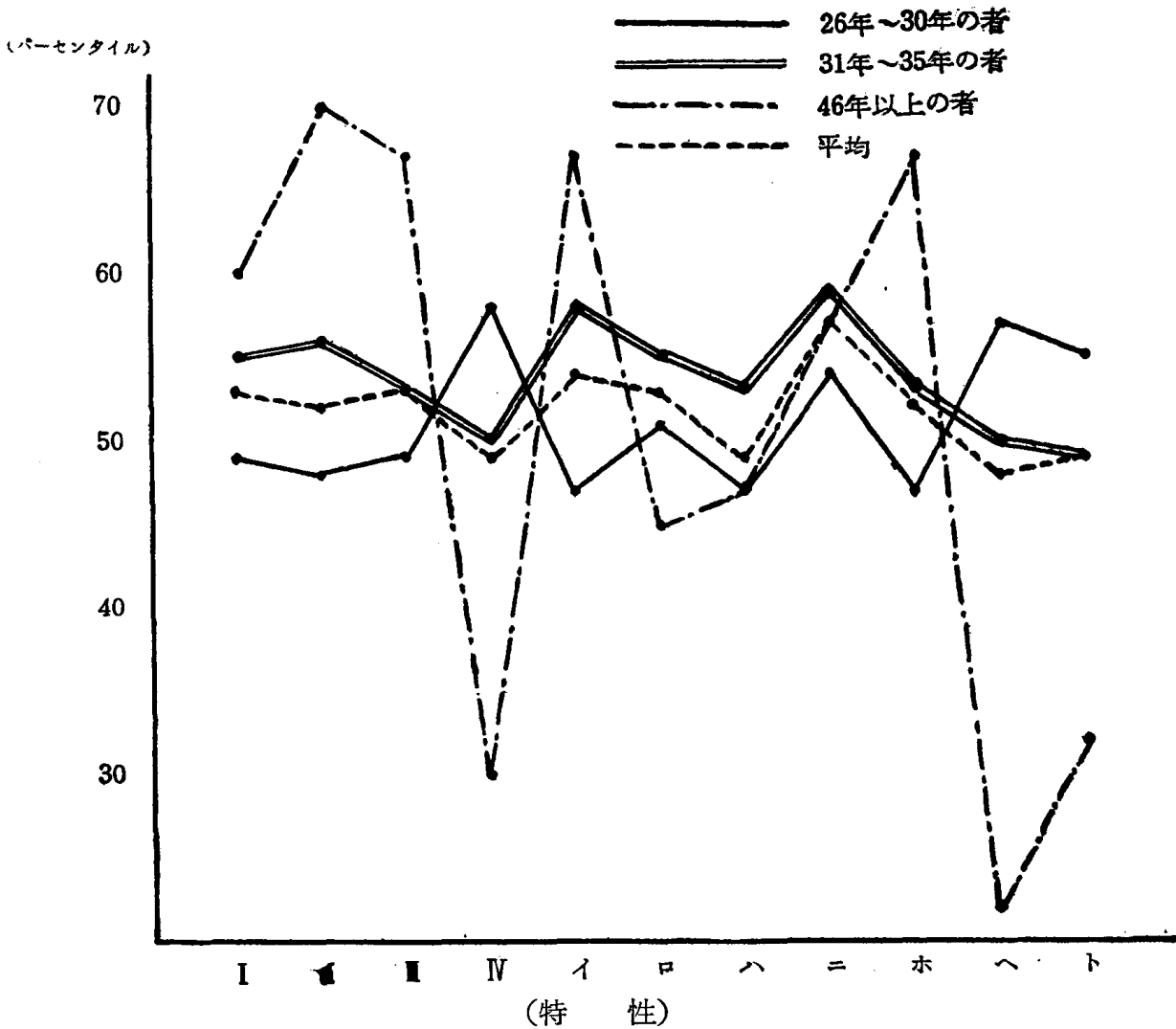
(第2図) 兄弟姉妹の数と子供の性格



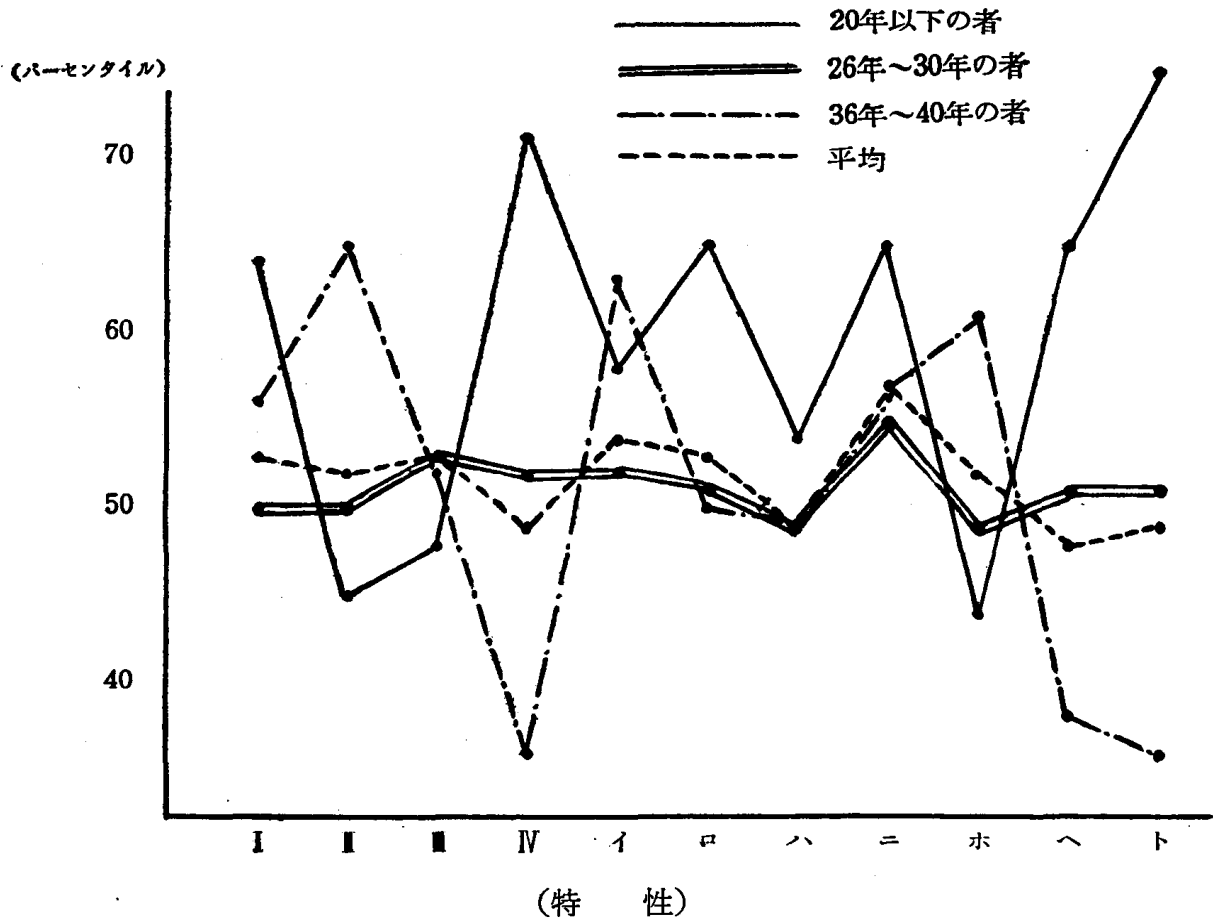
(第3図) 兄弟姉妹の数(同性のみ)と子供の性格



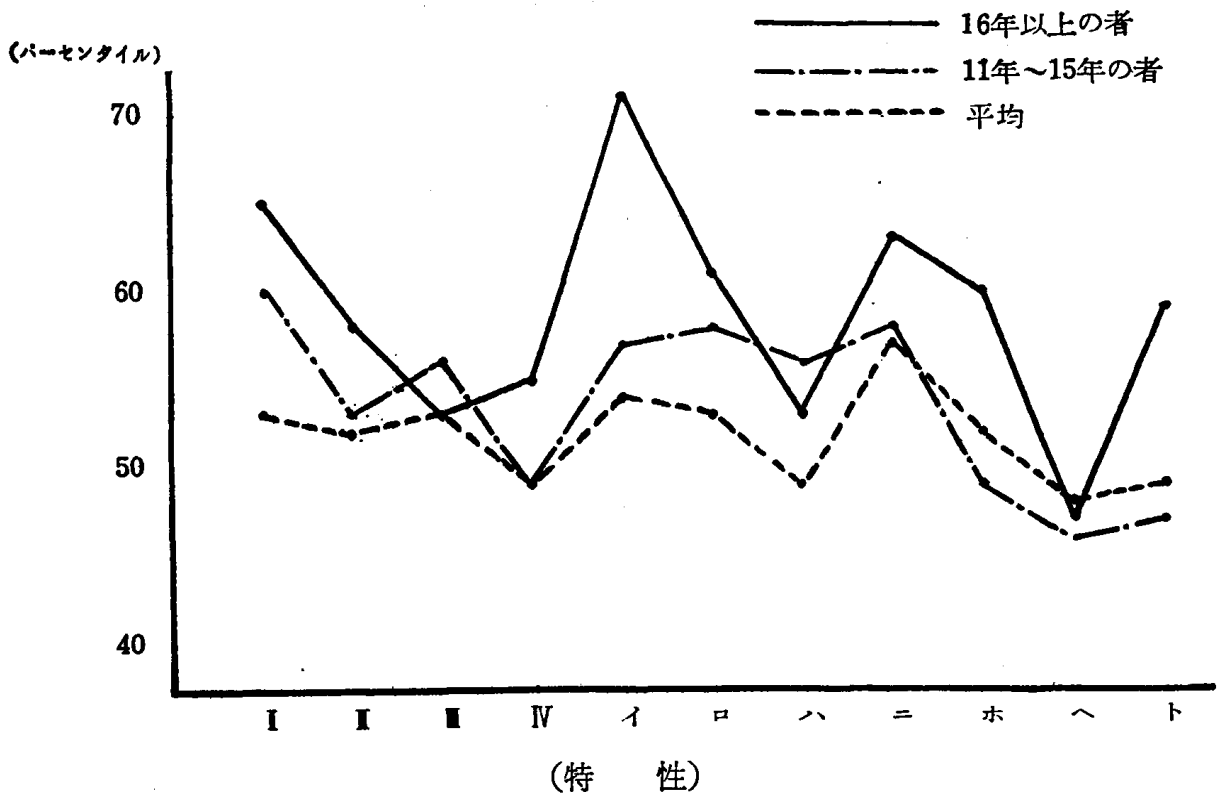
(第4図) 父との年齢差と子供の性格



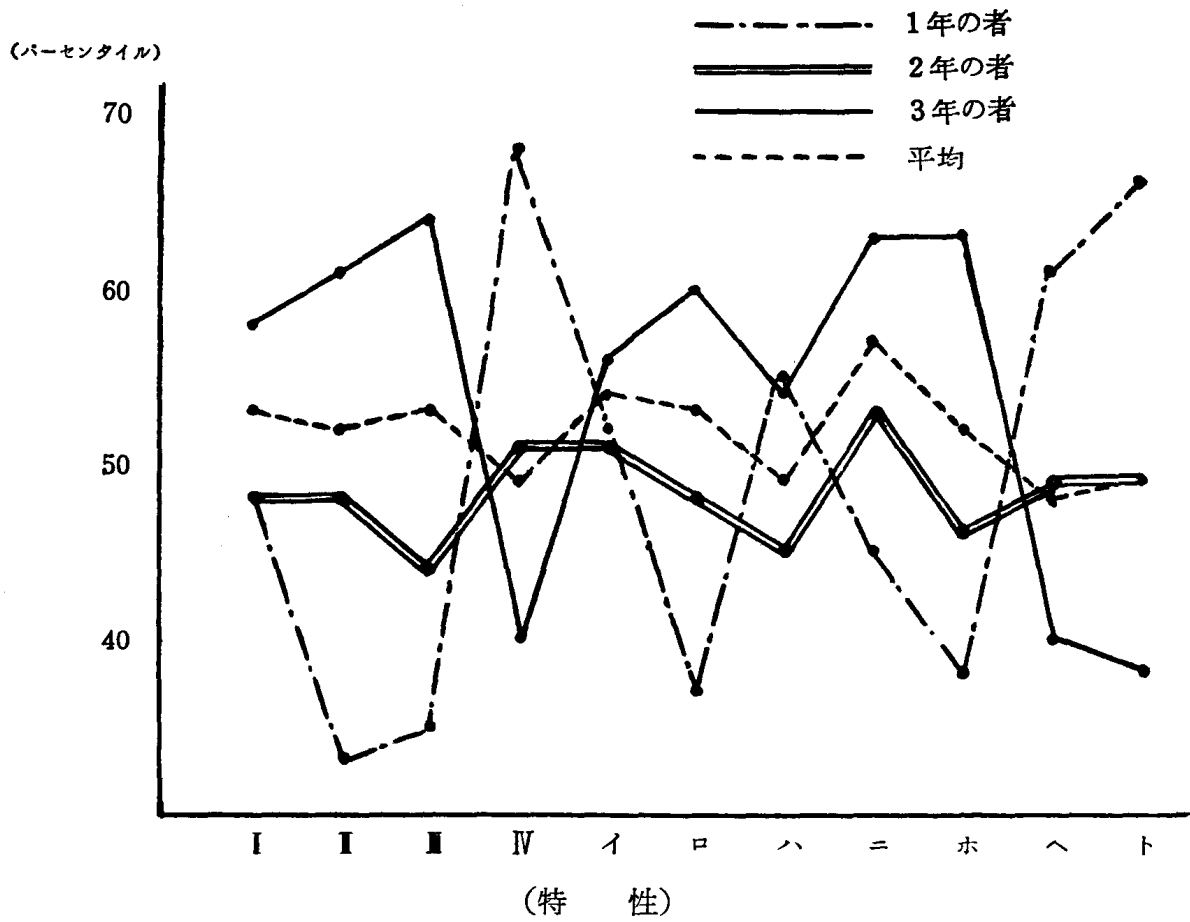
(第5図) 母との年齢差と子供の性格



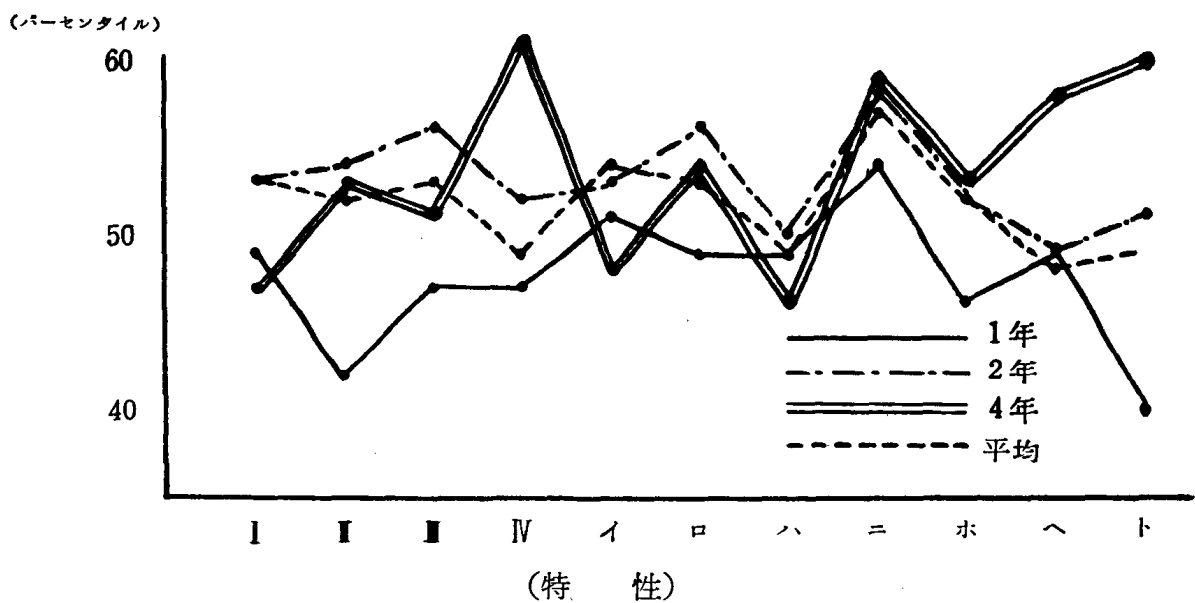
(第6図) 長子との年齢差と弟妹の性格



(第7図) 直ぐ上の兄姉との年齢差と弟妹の性格

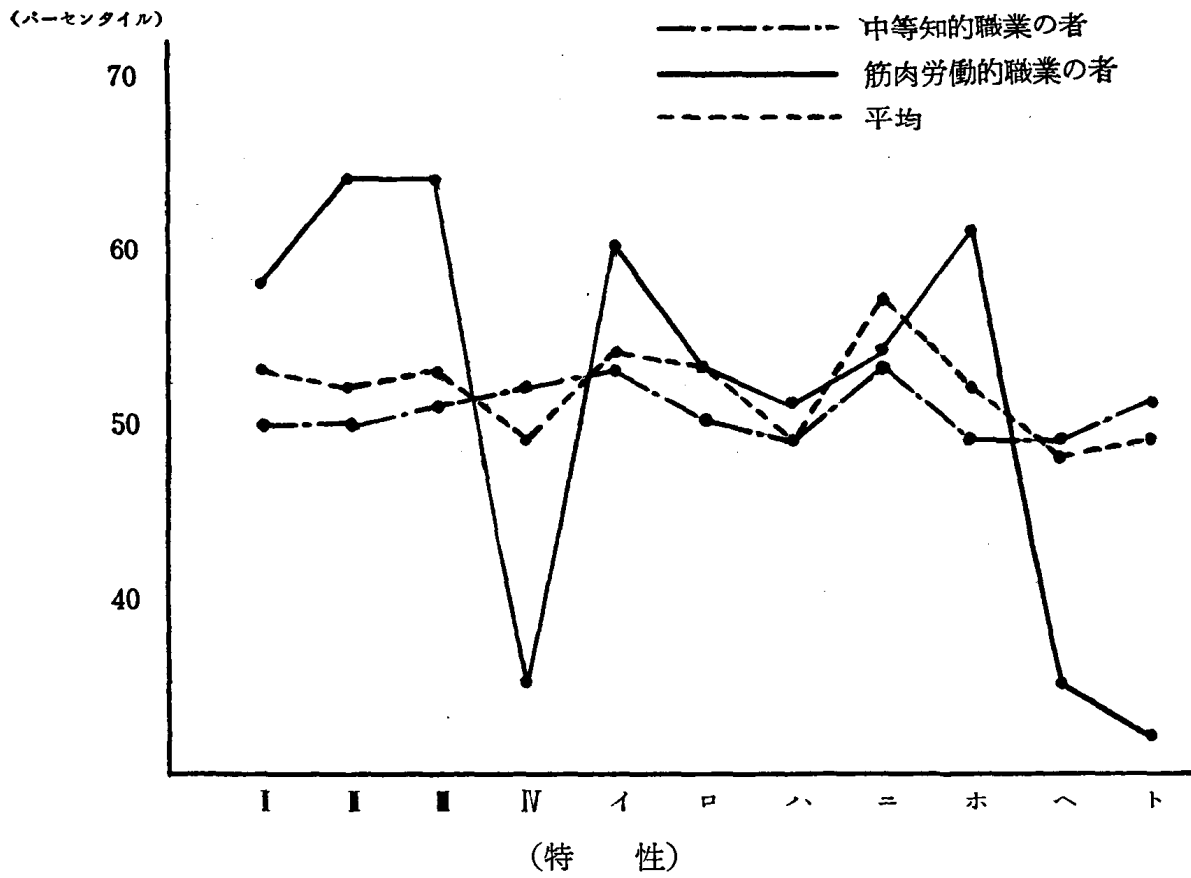


(第8図) 直ぐ下の弟妹との年齢差と兄姉の性格

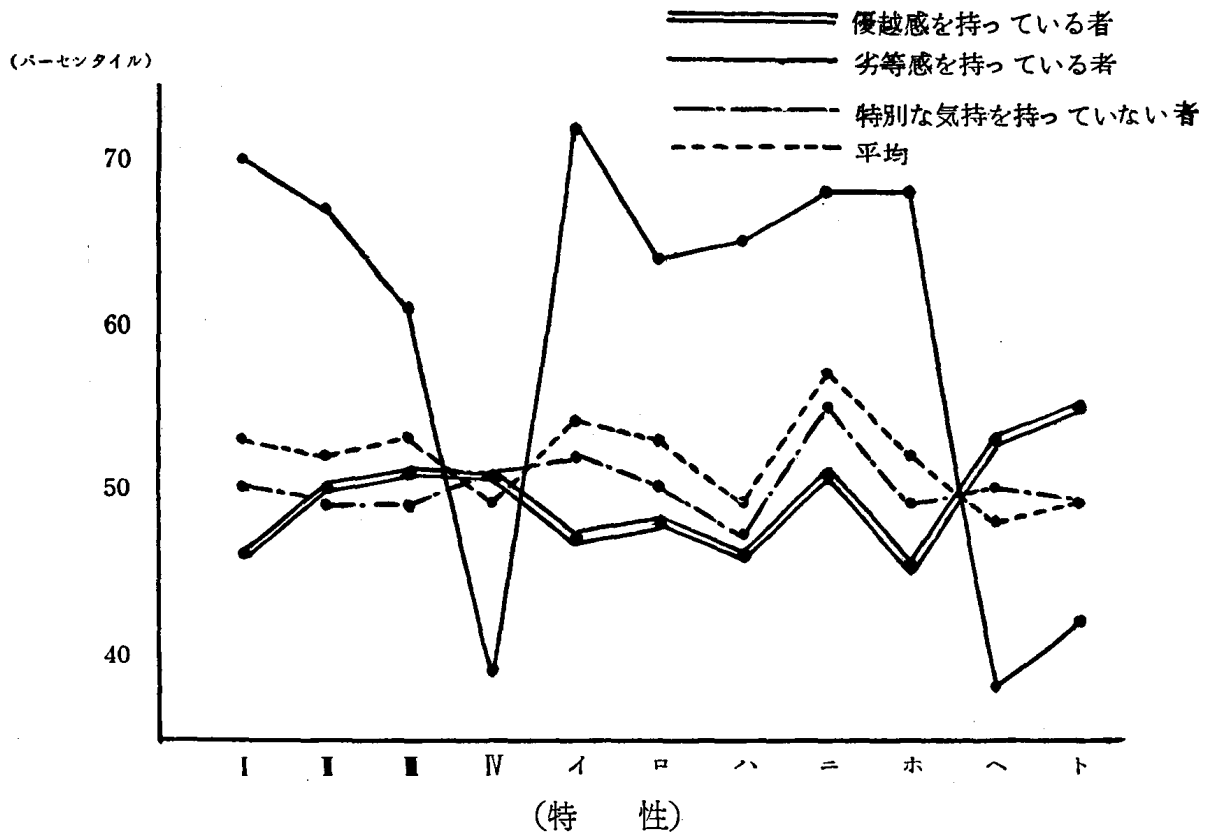




(第9図) 家の職業と子供の性格

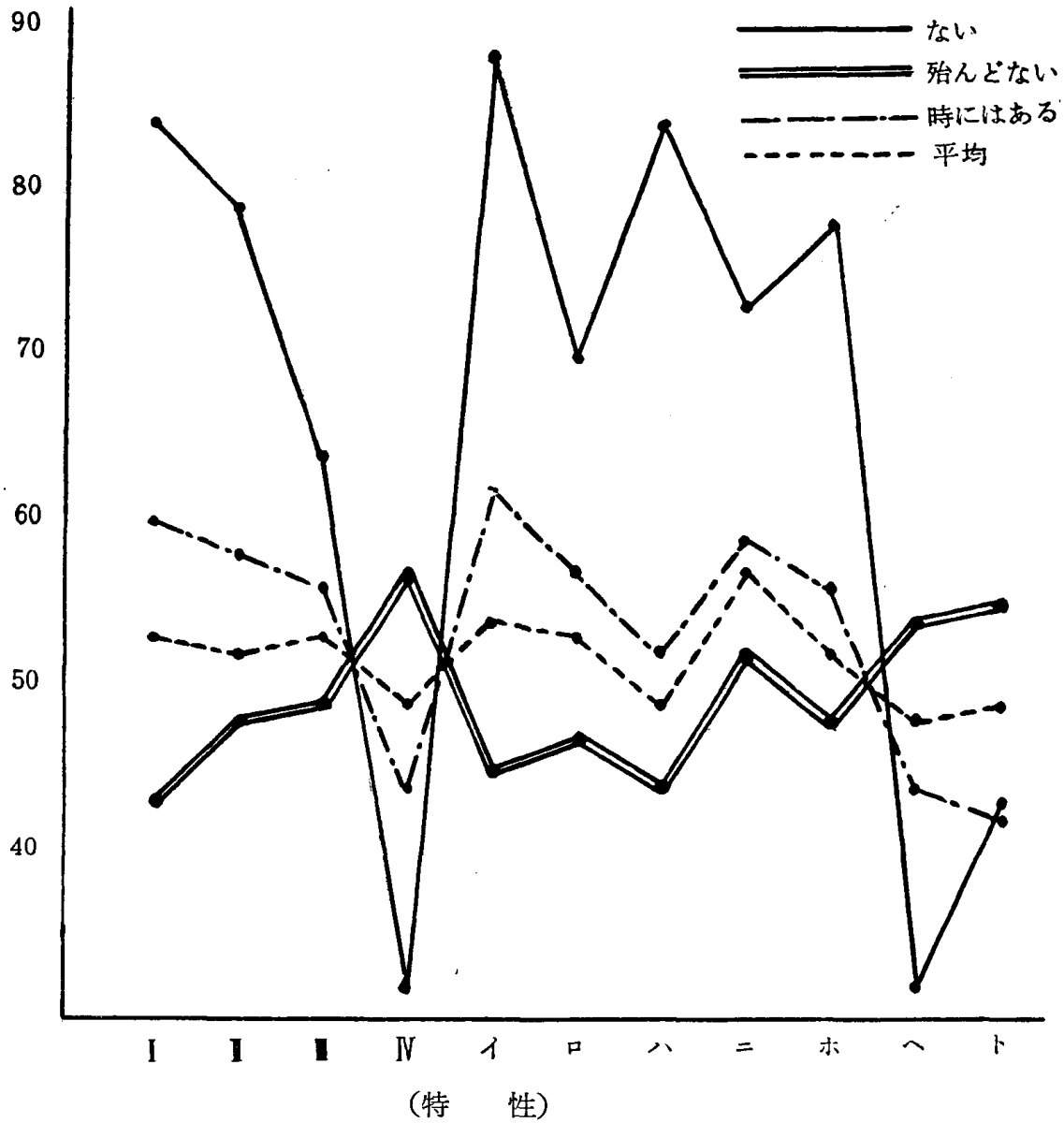


(第10図) 親の社会的地位又は職業に対して持つ感情と子供の性格

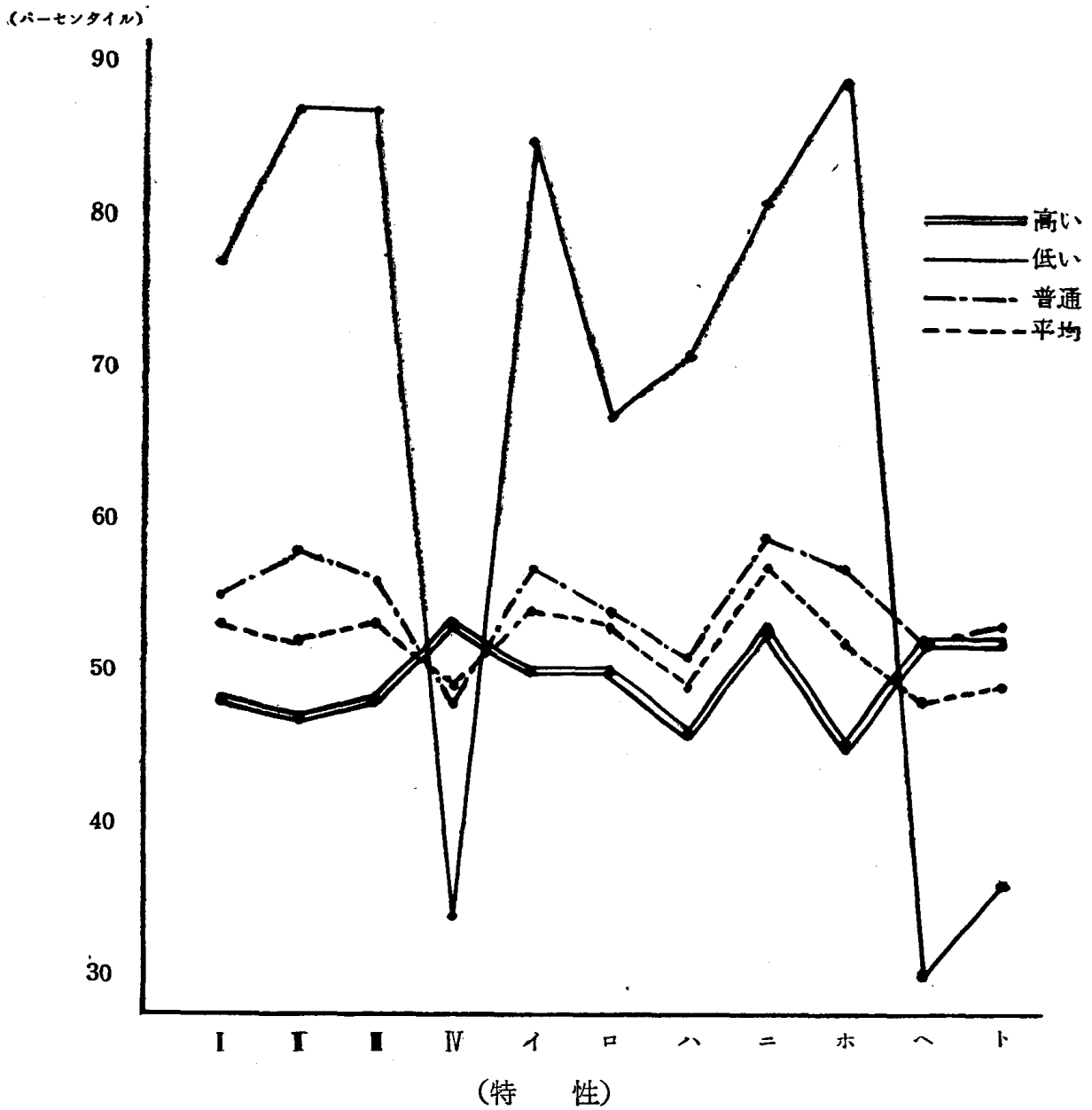


(第 11 図) 家庭内に於けるトラブルの数と子供の性格

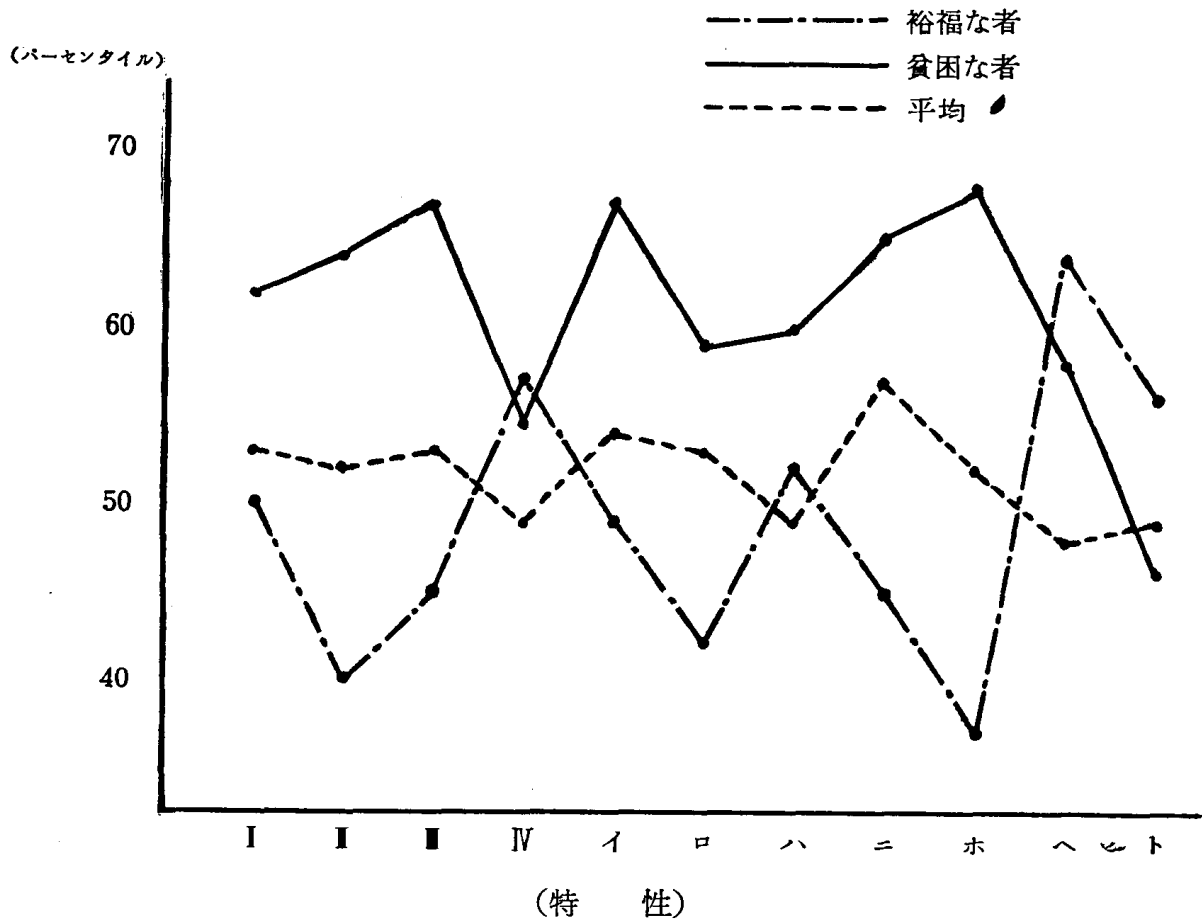
(パーセンタイル)



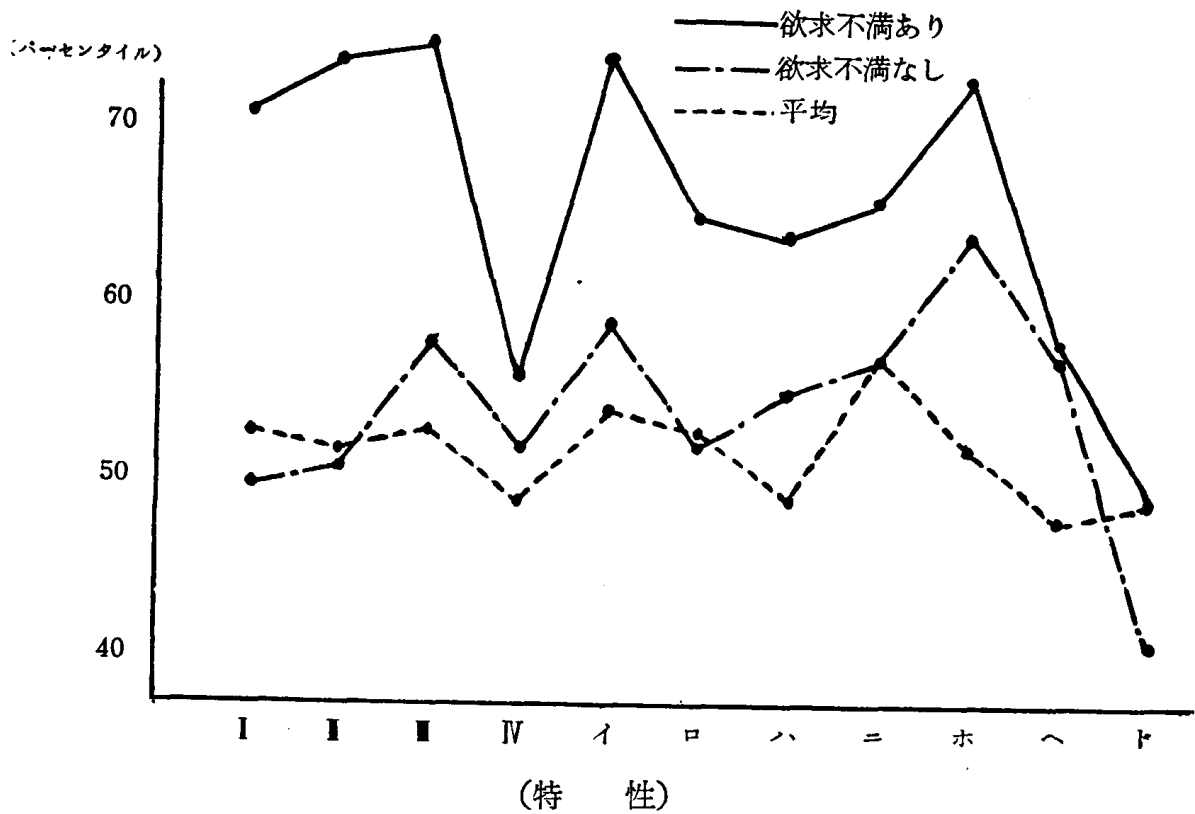
(第 12 図) 親の教育・文化に対する関心度と子供の性格



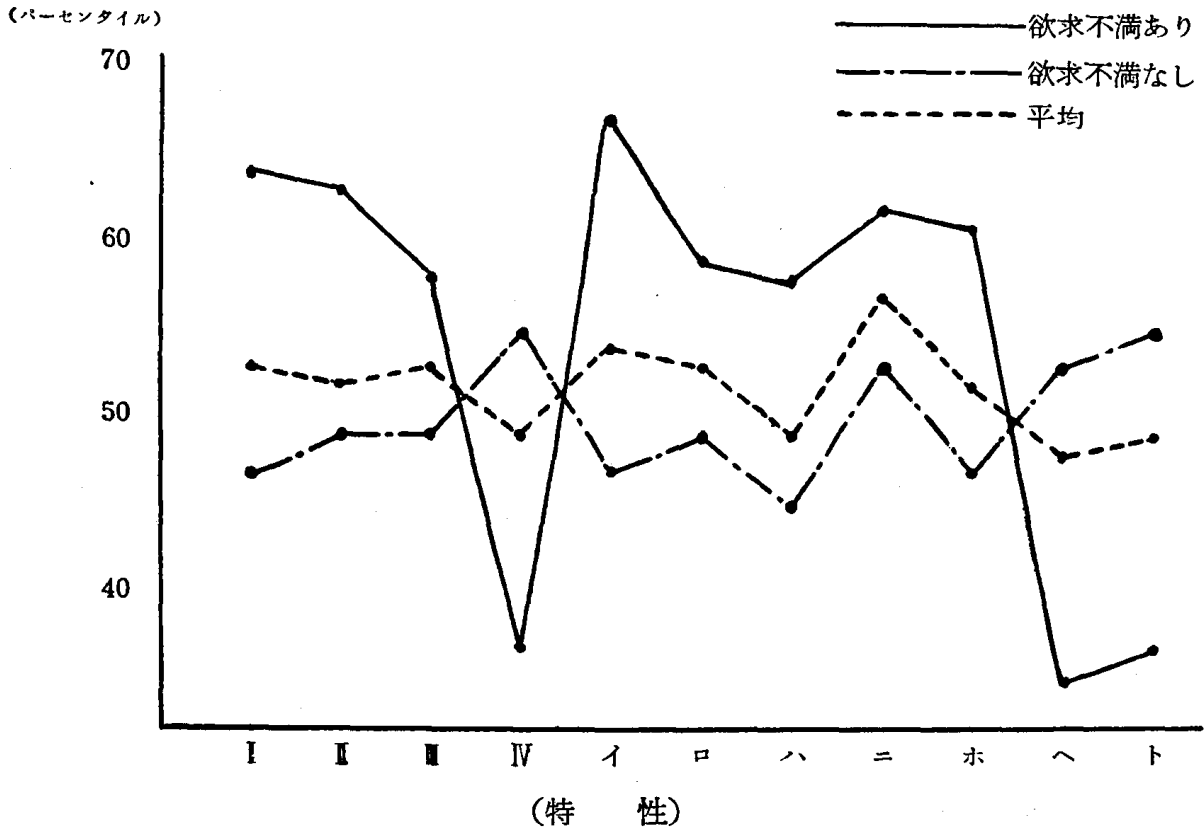
(第 13 図) 家庭の経済状態と子供の性格



(第 14 図) 家庭の経済状態 (貧困の場合) と子供の性格

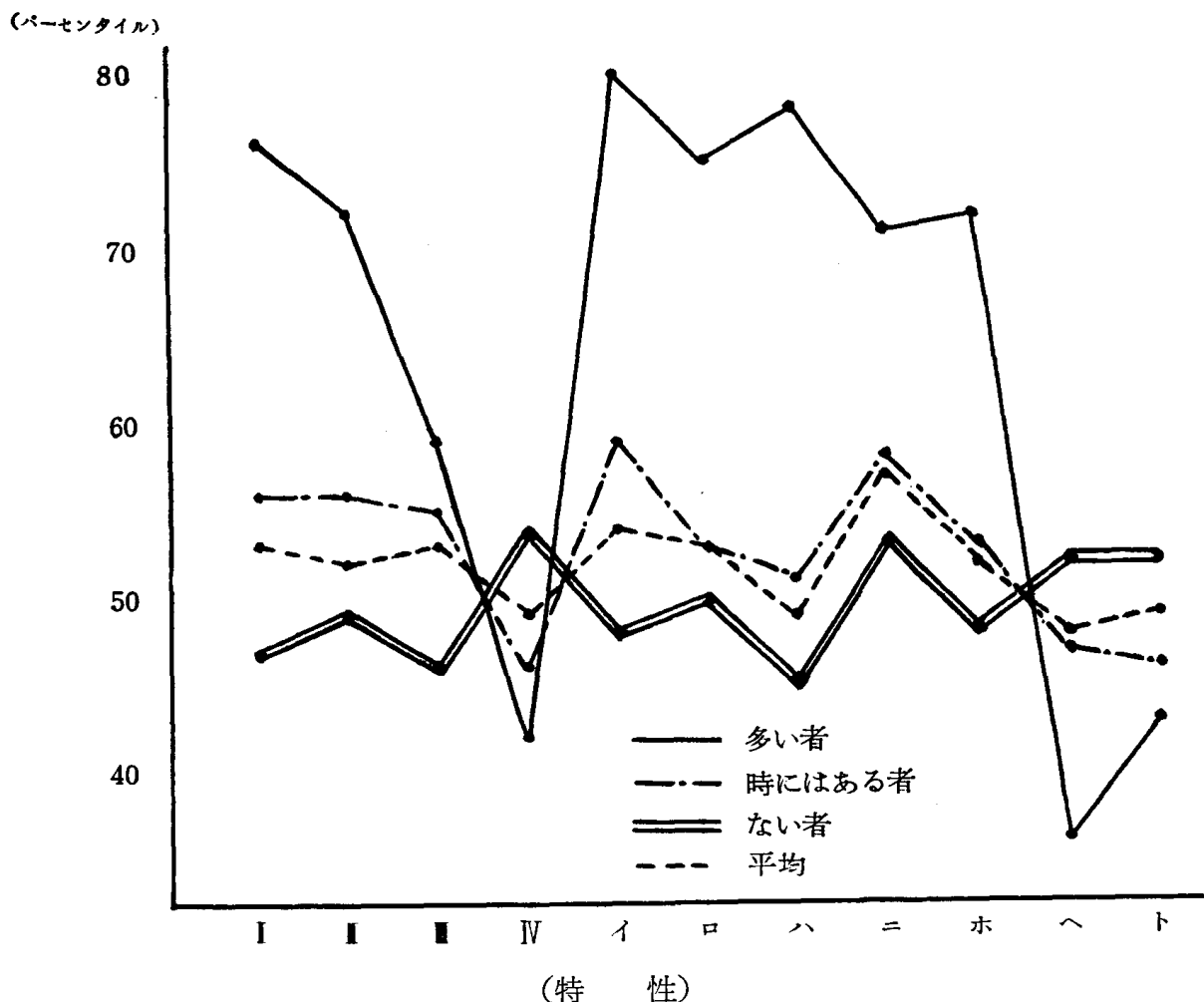


(第 15 図) 家庭の経済状態 (普通の場合) と子供の性格



1. 出生順位と性格との関係 (第 1 図) では、長子が大体各特性の得点とも、平均線上に在る過不足のない平均的性格の持主であるのに対して、末子は神経質的傾向と自己統制感に、自己統制感では、特に自己信頼感に問題の在ることを示している。末子のこのような性格的特質は、家族の過剰愛情と過保護によるものであろう。長子の平均的性格も長子であるが故によるものであろう。
2. 兄弟姉妹の数は (第 2 図)、多い場合と少ない場合とでは、対照的な性格を形作っているように思う。有意差は 1 人つ子の場合の、学校環境への適応感においてのみ発見されたが、多人数の場合も香しくない傾向を多くの点で示している。3 人の場合は中庸の性格になつている。
3. 兄弟姉妹の数が多くとも、同性の者は自分 1 人という場合 (第 3 図) はむしろよく、自己統制感、特に自己信頼感が高くなつている。これは自分のことは自然自分 1 人でせざるを得なくなつているということのためであろう。
4. 父及び母との年齢差を見ると (第 4 図及び第 5 図)、両親が若過ぎる時——この場合は特に母親が若過ぎる時に問題がある——、又老け過ぎてからの子供には性格的に問題があるようである。両親が精神的にも、肉体的にも、育児の

(第 16 図) 親の強制干渉の度合と子供の性格



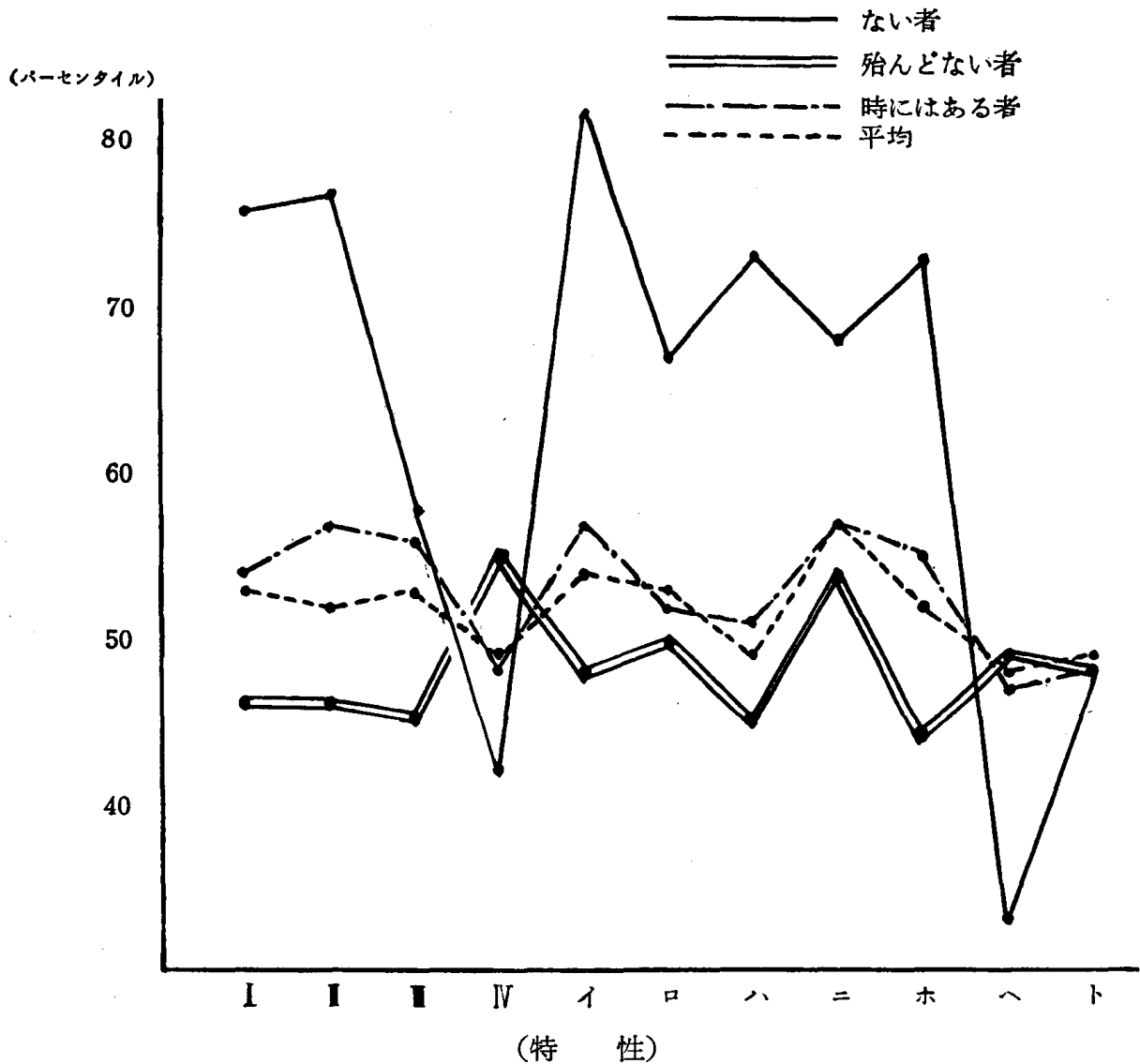
ために適当に成熟している時の子供には、一般に問題は少ない。

5. 長子との年齢差 (第 6 図) も、差が非常に大きくなると問題を発生させている。親のような人がもう 1 人増加し、時には親以上の力をもつて弟に圧力を加えていることによるものであろう。それは家庭環境への不適応感が増加していることによつて想像される場所である。

6. すぐ上の兄弟との年齢差 (第 7 図) は、弟の場合、1、2 年の開きはよく、3 年となると神経質的傾向、欲求不満感、自己統制感で非常に問題を孕んで来ることは、注意されなければならない。

7. 家の職業の性格への影響 (第 9 図) では筋肉労働的職業の場合に、マイナス的影響が現れている。しかしこれは第 10 図を見れば明らかな通り、劣等感を持っているからであつて、劣等感を持っていない限り、そのような影響は見られない。

(第 17 図) 親が批判の対象になることの度合と子供の性格



親も教師も子供の性格の素直な発達のために、職業に貴賤のないことをよく子供に教え込むと共に、如何なる職業に就いていても、親自ら常に操を高く保つていなければならないことを、このことは教えている。

8. 家庭間に意見の不一致、トラブルが多く家庭間の空気がそのために、常に淀んでいるということは、子供達の性格に大変な影響を与えるようである(第11図)。愛情の欲求不満と家庭への不適応感は勿論強く、神経質的傾向も大きくなっている。特に親は子供達のために、時には自分の感情を抑えて、家庭間を常に明朗化すべく努力しなければいけない。

9. 教育・文化に対して親の関心の低いことも、子供達のよい性格の発達にとってはマイナスである(第12図)。子供達は学校のこと、勉強のことといえ、

総ゆる事がらに優先する最も重大なことと考えているのに、それに対する親の関心が極めて低いということは、子供にとっては大変な打撃なのである。そのためにこの方面への関心の高い親は、よい性格の子供を形作っているのに対して、低い親は多くの点で甚だしく問題を持つた性格の持主を形作っている。

10. 家庭の経済状態は、裕福な場合は、子供達に自己信頼感を増加させ、その他の点でもプラスの影響を与えているが、貧困の場合は、一般に緊張型に属する問題の子供を形作っている(第13図)。しかし第14図、第15図で明らかのように、家の経済状態によつてマイナスの影響の現れるのは、多くの場合、子供がそのことのために強いフラストレーションを懐くからなのであつて、家の経済状態の如何に関らず、フラストレーションを少しも懐いていない子供に対しては、そのような影響は現れない。

11. 親が家や社会の慣習・伝統・名誉というようなものを重視して、ある態度、行動を子供に強制し、時には干渉を加え、子供の自由な意志に束縛を与えるというようなことも、度を過すと子供の性格の発達に重大な影響を与えることになる(第16図)。勿論ある程度の強制干渉は、有為な社会人を作るために必須不可欠のものでさえある。しかし度を過した場合には、親の意志に反し、かえつて社会人としては甚だしく不適切な、社会性を欠いた、神経質的傾向の強い人間が形作られてしまうということを忘れてはならない。

12. 親が道徳上子供の批判の対象になるようなことがあると、子供の性格の素直な正常な発達には期せられない(第17図)。生活環境への不適応感は高くなり、神経質な、それだけに又情緒的に極めて不安定な性格の持主となつてしまう。青年期になると自我の成長に伴つて、権威への懐疑・批判・反抗というようなことが行われ始めて来る。事実親にそのようなことをやられても仕方のない理由があるとしたならば、子供達の人格面への影響は非常に大きいものであるから、親は自己の態度、行動に対して、常に教育的配慮を忘れてはならない。子供の出生以来、その親愛と尊敬の対象となつて来た親の言動は、良くとも悪くとも、親だけに止つているということはないのである。

#### IV. 結 び

以上私は子供の人格発達にとつて影響的であると思われる幾つかの家庭的条



件を取り上げて、それが具体的にどのような影響を与えているかを、私の方法によつて探つてみた。

先ず調査の結果は我々に、家庭的条件の人格面への具体的な影響を知らせてくれると共に、家庭的条件の人格面への影響には、今までそれ程重要視していなかつたものの中にさえ、時には予期以上のものがあることを知らせてくれた。

次に非常な影響を与える家庭的条件の中にも、割に容易に変更出来るものと、変更の困難なものがある。例えば出生の順位、年令的開きなどは如何ともし得ないし、経済的条件、職業などにしても、殆んど変更することは不可能に近い。しかし殆んど変更出来ないようなそのような条件も、事実前掲の図表に示されたような結果を出しているのではあるが、実は人間の人格形成にとつては副次的な意味しか持つておらず、絶対的な意味を持つているものはもつと内部に奥深く潜むもの、例えば劣等感、欲求不満感、過剰愛情などであることを又今回の調査の結果は知らせてくれた。

以上私の今回の調査の結果が、世の親、教師になんらかの参考になるものを提供することが出来たならば、非常な幸である。

(註) (1)正木 正著 性格指導検査表 (金子書房)

(2)性格指導検査表が検査しようとする右記の特性。

いずれの特性も、検査の結果高い得点 (パーセントイル) を得た時は、それらの感情を強く持つていることを意味する。

(3)比較調査しようとする各群のことで、例えば、“出生順位と子供の性格”中の、長子、次子、末子などが各群である。

(4)全員の各特性別平均点は次の通りである。

特 性	
I	環 境 不 適 感
II	神 經 質 的 傾 向
III	欲 求 不 満 感
IV	自 己 統 制 感
イ	家 庭 不 適 応 感
ロ	学 校 不 適 応 感
ハ	愛 情 不 満 感
ニ	能 力 劣 位 感
ホ	情 緒 不 安 定 感
ヘ	自 己 信 頼 感
ト	社 会 成 熟 性

特 性		平均点 (パーセンタイル)
I	環境不適應感	53.29
II	神經質的傾向	52.54
III	欲求不満感	53.72
IV	自己統制感	49.98
イ	家庭不適應感	54.31
ロ	学校不適應感	53.91
ハ	愛情不満感	49.60
ニ	能力劣位感	57.83
ホ	情緒不安定感	52.59
ヘ	自己信頼感	48.06
ト	社会成熟性	49.28

#### 参 考 文 献

- Baldwin, A. L., "Differences in Parent Behavior toward Three-and Nine-Year-Old Children", *Journal of Personality*, 1947, 16.
- Blake, R. R., "The Relation between Childhood Environment and the Scholastic Aptitude and Intelligence of Adults", *Journal of Social Psychology*, 1949, 29.
- Bossard, J. H. S., *The Sociology of Child Development*, New York, Harper & Brothers, 1954.
- Carpenter, J. and P. Eisenberg, "Some Relations between Family Background and Personality", *Journal of Psychology*, 1938, 6.
- Cattell, R. B., *Personality*, New York, McGraw-Hill, 1950.
- Hall, D. E., "Domestic Conflict and Its Effect on Children," *Smith College Studies in Social Work*, 1930, 1.
- Levy, D. M., *Maternal Overprotection*, New York, Columbia University Press, 1943.
- Parsley, M., "The Delinquent Girl in Chicago: The Influence of Ordinal Position and Size of Family," *Smith College Studies in Social Work*, 1933.
- Stagner, R., *Psychology of Personality*, New York, McGraw-Hill, 1948.
- Stott, L. H., "General Home Setting as Factor in the Study of the Only versus the Non-only Child," *Character and Personality*, 1939, 8.
- Symonds, P. M., *The Psychology of Parent-Child Relationships*, New York, Appleton-Century-Crofts, 1939.